

〔研究〕

 γ -E グロブリン測定における種々の知見 第1報

水戸赤十字病院検査部

大 川 義 栄 栗 原 浩 子
吉 川 敏 子 野 上 有 信

I 目 的

E型骨髄腫、アレルギー性疾患（アトピー型喘息、皮フ炎、花粉症、アレルギー性鼻炎）等が増加する γ -E グロブリンの測定を Single Radial Diffusion 法で行ない、いくつかの知見を得たので報告する。

II 方 法

当院、皮膚科に入・通院するアレルギー性疾患患者 258名について、ヘキスト社製 Partigen γ -E, Plate を用い測定した、操作はキットに指示された通りに実施した。

III 結 果

表 I に示す如く、測定した 258名中陽性を示し

表 1

臨 床 診 断	例 数	陽 性 %
ア ト ピ ー	10	50
L E 素 因	4	20
蕁 麻 疹	1	30
ベ ー ゼ ッ ト	1	
日 光 疹	1	
アレルギー性静脈炎	1	
デューリング皮フ炎	1	
成年性浮腫硬化症	1	

た例は20名、全体の 7.8%の陽性率であつた。20名を臨床診断別にみると、アトピー性10名、LE素因4名、蕁麻疹1名、ベーゼット1名、日光疹1名、アレルギー性静脈炎1名デューリング皮フ炎1名、成年性浮腫硬化症1名である。同時に測定した健康人10名については全く陰性であつた。

IV 考 察

(1) 今回我々は本測定法を日常検査に導入する目的で検討を重ねてきた。

本検討をはじめのにあたつて、まず、次の様な経過をたどつた。最初ハイランド製抗血清を用い免疫電気泳動法で測定したが陽性例がなかつた。これは抗血清の純度あるいは手技に問題があつたかどうかは不明である。

次にヘキスト社製 Partigen γ -E を用い免疫拡散法を採用したが同結果であつた。

再三、メーカーに検討を重ねていただき本結果を得たのである。

最近では本測定法により0.05～0.8mg/dlの濃度範囲で半定量も可能となつた。

本測定法は簡易かつ操作上の問題点も少く今後ますます普及されることと思われる。

(2) 結果に示す如く、陽性例ではアトピー皮フ症に限局しており、臨床診断16名中11名で68%の陽性率であつた。陽性例患者について連続測定したが、臨床症状増悪にもかかわらず陰性例もみられアトピー皮フ症だから必ず陽性とはいえない様な気がする。この様な理由から本測定法を採用するにあつては同一患者について連続測定する所に意義があると思われる。この問題については今後更に検討を要するであろう。

V 結 語

現在迄、アトピー皮フ症の診断は主として臨床症状及び附帯する 参考的な 臨床検査 によつて來た。 γ -E の測定はその診断の本質的なものと考えられ素因の分類が可能になつたと思える。 γ -E 産生能に遺伝的傾向がみられ、それを抑制するものが抗リンパ球血清と免疫抑制剤である事は同じ迅速型アレルギー反応でも、例えば蕁麻疹のようなものでもその治療法の選択と予後の推定に重要な参考とならう。

又、予防接種に対する考え方にも同様である。
本反応は健康人血清の含有度をも証明可能なところまで発展する事が当聞の検査手技開発として課せられている。

そして簡単に出来る事も必要である。今後その努力を重ねる事によって患者治療のためにより有

用であるように考える。今後の御指導を深くお願いする次第です。

最後に御指導して下さった 水戸日赤皮膚科部長赤坂陽先生、順大只野寿太郎先生に深謝致します。

(第21回日本衛生検査学会に於て発表した)

関東化学の

臨床検査薬

厳密に

何時も検査する人の立場で、製造しております!!

血清トランスアミナーゼ測定用 エ ス ゴ ッ ト	100回分	血清カルシウム測定用 <シカ> Ca テ ス ト	50回分
アルカリ性ホスファターゼ測定用 新 シ カ フ オ ス	100回分	血中尿酸測定用 <シカ> U.A テ ス ト	50回分
酸性ホスファターゼ測定用 酸 シ カ フ オ ス	50回分	血清無機リン測定用 <シカ> P テ ス ト	50回分
中性脂肪測定用 リ パ テ ス ト	45回分	血清鉄測定用 <シカ> Fe テ ス ト	50回分
血清総コレステロール測定用 コ レ ス キ ッ ト	250回分	尿中17-OS測定用 オ ス キ ッ ト	50回分
血糖測定用 グ ル コ テ ス ト	100回分	尿中17-OHCS測定用 オーバーキット	50回分
尿素窒素測定用 ユ リ ナ イ ト	50回分	テクニコン社処方 オートアナライザ用試薬	各 種



鹿 印

関東化学株式会社

東京都中央区日本橋本町3丁目7番地
〒103 T E L (03) 279 - 1751 (大代表)